

GR  
白雲嶺

とり  
り  
お

埼玉 名栗

50

昭和56年1月10日

宗教法人  
白雲山

鳥居観音

# 表紙説明

## 観音の滝

鳥居観音から約1kmのところ、救世大観音のうしろの谷にある滝で、ここに平沼先生が製作された観音様があります。故に観音滝といえます。夏は特に涼しくて、よく人が集う。高さ15m。

## とりゐ第50号目次

裏表紙	春の行事案内と地図	一七
鳥居観音だより		一七
謹賀新年互礼		一三
田舎医者(其二十九)	見川鯛山	一〇
西遊記(其四十三)	岡部千三	七
観音行の実践	光山善雄	四
道光禪師御法説(其三十二)		二
謹賀新年	開祖平沼桐江	一
表紙	観音滝	
	うら説明	

# 謹賀新年

開祖 平沼桐江

九十翁

皆様明けましてお芽出とうございます。

昨年は厚い御支援御協力を賜りましてありがとうございます。厚く御礼申し上げます。

私、昨年八十八才を迎えました。そこで記要から「米寿までの歩み」と題し、出版いたしました本が多岐の方々に、興味をもって、読まれていると、うかがいまして、深くよろこんでおる次第であります。

本年は九十才を迎えることができました。

健康回復も観音様のご加護のおかげ……………

四方有縁の方々のご支援、御協力のおかげ、と

皆様方のお姿に接する度に、よろこびと、心の安らぎを感じ、意を強くいたしております。

それによって、日日を感謝しながら、毎日を通してあります。

皆様のおかげをもちまして、当山は色々な行事を通じて、ご来山の方々も増加して参りました。

白雲山特有の自然は年々趣を深めてきました。

私手がけましたつつじは、山内に十万本、花が咲くと、全山絵の如く、正に春の風物となりました。観世音菩薩様がこの花にかこまれて、うっとりやすまれることもあろうかと思えます。

秋の紅葉は四十年の年輪と共にすばらしい色をそめ出します。これは天下にすぐれたものとなって参りました。

仏像も歴史を経るにしたがって、その重厚さが増すと云われ、その価値は評価できません。

これ等仏像も建物も日本に稀なものとなりました。大鐘楼の鐘の音がひびく度に、観音様への祈りと平和の願いが、わき起ります。

皆様本年もよろしく御支援下さいますように、心からおねがい申し上げます。

合掌



## 世間

(其の三二)

「理論ならんより寧ろ情実なるをよしとす」  
と云いますのは、若い者はとかく理論でいくが、年寄は経験から万事情実でいく。そこにどうも新旧の意見の合わぬところから、年寄は論ずるに足らんと云って衝突しょうとつをします。けれども理窟ばかりで世の中はいくものではありませんから、理論よりも情実でまとめていく方が有効であります。

それからつぎに、

「言語もまた本来空の活動にぞくするを以て人の住する所を察し、機に応じて其の感情を活殺すること自在なるべし。言語はよく国家を興起し、又よく滅亡せしめ、一身を安泰にし、又危険ならしめたる

例今古渺しとせず、故に韓非（中国戦国時代、法家の大成者、しばしば韓王を諫めて入れられず）に言難説難を説けり。忽にすべからざるは言語なり」とあります。

言語はよく国家を興起し、またよく滅亡せしむるとは、国家の権威者、すなわち大臣などの一語は、国家的に言えば、自分のことばづかいで自分を生かすこともあれば殺すこともあり得ます。それほどにことばづかいはむずかしいのです。それに自分の言った一言が、十にもなつて、人につたわっていることがあります。また自分ではいった覚えもないのに、あの人がかういったなどと、陰でうらまれていることもある世の中ですから、よほど用心していかないこと、禍いをまねくことになります。実にことばほど人の感情を支配するものではありません。つぎに、

第五が衣服と家屋、これも自分の力で、ぜいたくするのはさしかえないようですが、他人の感じはそうではありません。ぜいたくすればやはり人目に

はいかにも見せつけられるように思われて、世間の反感を買うものであります。いくら財産があっても、することでも、たとえば自動車の出はじめころは、ブウブウ鳴らして、尻の方から臭い煙を出して、傍若無人にほこりを立てていけば、通行人はそれを見らんでいたように、すべてがそうでありますから、どれほど自分に力があってもすることでも、よほど考えなければならぬことであります。それで文に「浮薄華美に過すべからず、本来空の身を覆うを以て旨とし身分職業に應じて見ぐるしからざるを要す」とあります。

浮華に流れず、身分職業に應じて、見ぐるしくないでいどでいけば結構であります。人にはねたみがありますから、華美にすぎますと、世間の人の感情にさわるものです。およそものごとは、万事適度でいくことが大切なことであります。また反対に、「断空の徒殊更にこれを阻悪ならしむるが如きは却つて人の嫌忌を招くべし」とあります。

これは世の中をつめたい目で見すぎて、ことさら

に風のはったような、裾の切れた垢じみた着物をきて、遠りよもなく他家の座しきに坐りこむなどということも、やはり注意しないと、もっとも悪い感情をいだかせることになります。つぎには、

#### 第六は正直

「本来空なるが故に宜しく正直を以て終始すべし正直なれば鬼神も亦之に感動す」と、

之は説明するまでもありません。つぎは

#### 第七は礼讓

「本来空なるが故に人に対して宜しく礼讓なるべし。己の能に誇り自ら高うして不遜なるときは人の嫌忌を招くべし」と。

これは人間には、うぬぼれがありますから、人のよいことは着めたくありません。したがって猜みがあるのです、どれほど偉い人でも、余り自分からいばりますと人が反感をもって、あの人は偉いか知らんが、なあんだといや気をおこさせます。それで偉ければ偉いほど、たいどを低くすることが礼讓であります。

# 観音行の実践

兵庫 庫 景

西正寺

光山

善雄

## 三毒を三徳に転換

つづき

観音様を念ずれば愚痴は消滅します。海の中の魚は海水を離れては生きられない。海水によって生かされているのです。ところが台風が吹いて、大津波と共に海辺に打ち上げられると、魚は海水をはなれたものだから、正に瀕死めんじの状態であります。これを救うにはどうしたらよいか。親の「ふところ」にもどることです。海に帰すことです。

「現代人もかくの如し」で親心からはなれ、愛情からはなれております。人間の苦悩は物質的に恵まれていても、心が空白のためにノイローゼだの、煩悩の心の病いの多いことは信仰心がなく、心の親を忘れたからでしょう。

赤ん坊にしても一人では淋しい。親を求めため

に泣きます。母はその泣き声を聞いて赤ん坊に母乳をやりますと、すいづくように飲むと、泣き声は止んで笑顔をいたします。子が母を憶うように私達が心の親として観音さまを憶念おくねんしたら、必ず心の親は映像されてまいります。

いつも貪欲どんよく・瞋恚しんに・愚痴ぐちの台風では親の映像は写りません。心は暗黒となりましょう。

心が暗いと物につきあたる。衝突事件が発生いたします。自動車の衝突も恐ろしいことですが、人間同士の衝突はまたこわいことです。どんな事件が発生するかわかりません。

観音さまと一体となることにより、三毒の煩惱も三徳に転化され、不浄の世界が清浄の国土になり、合掌の花園に転ずるのです。三徳とは慈悲、智慧、勇気の三徳であります。

○

釈尊がお弟子をつれて王舎城外を托鉢された時、貧しい農家の妻が出来たてのお粥を主人のところへ運んでいました。ちょうどお昼の中食の時間です。

積尊の三十二相の尊い妙相を拝見しただけで、農家の主人は合掌礼拝して「如来さまこの貧しい百姓の小さな供養をお受け下さい」と云って「お粥を一杯」如来に捧げました。如来はこれをうけとられ合掌され、「あなたはよい心を持っておられる。この布施の行によつて幸福を受けることが出来る」と申されて、この一杯のお粥を弟子に渡され、「弟子よこの供養のお粥をそこに見える井戸の中にあけるがよい。そうすればこのお粥は千人分、万人分にもふえて皆を養うことが出来る」と云われました。

弟子がこの供養のお粥を井戸にうつしますと、一杯のお粥が千倍、万倍となり、井戸の中からお粥が湧いて出ましたので、多くの弟子達はこれで満腹しました。

積尊の一行は農家の主人と別れました。農家の主人は、このお粥の奇蹟を知り、ますます信心を深め如来の後姿に合掌いたしました。

農家の主人が麦畑に行きましたら麦が全部実り金色に化して、一面の畑は金色に輝いています。

驚いたのは農家の主人です。

何んと有がたい如来さま

悩みの雲は吹きとんで

少ない種子を蒔いたのに

こんなに多く実るとは

と、朗らかに歌いました。

早速国王様にこの金の麦を献上しなければなりません。いくらなりとおとり下さいと申し出ました。

王様は臣下に命じて「早速金の麦をもらいに農家の小屋に行くがよい。なるべく多く金の麦をとるがよい」と命ぜられました。使者は強欲にも少し残して全部王宮に運びました。

王宮では金の麦が到着すると云うのでおおさわぎです。ところが王宮に持参された金の麦は普通の麦になつてしまいました。これは何かの間ちがいだ、早く金の麦と取替えてこいとこの王の命令で取り替えに行きますと、農家の主人は金の麦は全部、王様のものですよ、遠慮なくお持ち下さいと申し、使者が黄金の麦を王宮に運びますと又もとの普通の麦に変

りました。王様は「これは自分が強欲のために徳がないが、あの農夫には貪欲がないから、如来さまからお与え下さったのだ」と悟り、釈尊の教えを聞くようになりました。

「施す者は福を得る」とありますが、施す人、与える人になってこそ、理想の人間と申せましょう。釈尊は仏教と云う教えを世界の人々に伝えて下された。

今日まで、二千五百年、全世界の人々の心の光りとなり、生命となつて教えは生きております。

人間同志が拝み合い、許しあつたなれば、この世界は浄土に化し、泥の中から蓮華の花を咲かせます。

花一杯になるよう努力いたしましょう。

「明けましてお芽出とう」と、年頭のあいさつを交し、お雑煮をいただく、この新春の喜びはお互いに感謝の喜びであります。

仏壇にお供えや、お灯明をあげて静かに合掌礼拝し、過去のさんげをし、将来の希望を念願壽ぎ奉る

事は、仏教徒として、なつかしい正月行事です。

このお正月の「日の丸の旗」の輝くごとく平和な明るい姿がわれわれの理想でなくてはなりません。

私達終戦後の耐乏時代の正月には「餅なき正月」を迎えたこともありました。

数年前北海道は冷害のため農民でさえ「餅なき正月」を迎えたこともありました。

そんな時でも、正月は正月としての心新たに希望と勇気をもって前進したのです。

心の財産こそ私たちの幸福というものです。

文化日本の父である聖徳太子は、世界の人々が、歩むべき道を示したまい「和を中心」とする睦みあい、助けあい、はげみあい、そして明るい、住みよい文化国家の建設が目的でした。

先家庭を明るくし、隣人にも飢えたる者なき、争いなき社会を一日も早く築くことであります。

「合掌礼拝」により一億国民が一つになり、合掌の花を咲かせることです。

ここから人間の平和と幸福は誕生するのです。





## 西遊記

(其の四三)

岡部千三

### 正 体

つゞき

大きなまぐわをふりあげて、女たちのあたまの上で、ぶーん、ぶーんとふりまわしたので、

「ごめんなさい、八戒さま。」

「知らなかったのですわ。法師さまは、ごぶじですから、そのまぐわだけは、おゆるしください。」

女たちは、湯の中をにげまわった。

八戒は、おもしろくなって、持ったまぐわを湯の中へいれて、むやみにかきまわしていた。

ところが、女たちはずるかしく、にげるふりをしてしながら、するすると糸をいつの間にかくりだした。さっと、八戒になげかけて、八戒をあわてさせた

八戒は

「へんなことをするな。糸をとれ、糸をとれ、」

と、八戒は、ようやく口がきけるだけ。じまんのまぐわも糸にからまって、ふりまわせなくなった。女たちは、温泉からすくすくとあがった。糸でからだをつつんで、もとのすまいへ走って行った。

のこされた八戒は、いも虫のようにころころと、ころがって、ようやく悟空のところへもどり、糸を切りはなしてもらった。

「悟空のきょうだい、ひどいめにあったよ、なんとかこのかたきをとってくれ」

「おまえのかたきうちよりも、お師しようさまがしんばいだぞ、八戒、こい、悟浄もこい。」

女の家にかけてつけた悟空たちは、如意棒やまぐわをふりまわし、まわりの糸をずたずたに切りとった。それから家にはいって、はりにつるされた法師をおろした。が、気がついてみると、女たちがいない。どこにも見えない。

「お師しようさま、女のまものたちはどこへいきましたか。」

「おまえたちのきたのを知って、うらの方へ逃げ

て行ったようだよ。」

「それっ、おいかける、」

八戒、悟浄は、いきおいこんで、うらのほうへと  
びだして行った。

### くもの糸

「おしし

ようさま、

旅の者をく  
るしめるあ

の女たち、

どこまでも

おいかけま

しょう。」

と、悟空は

ほんとうに

おこっつい

た。そして

女たちの行った方へ、法師をせきたてていた。



そして行くほどに、ある大きなやしきについたと  
きのことである。

庭で丸葉をつくっていた道士が、法師を見て声を  
かけた。

「ごえんりょなく中へはいって、おやすみ下さい」

道士はおとなしそうにみえた。けれども、実は、

七人のまもの女のなかもだった。

「おまえたちをさがしている坊主たちがきたよ」

道士は、おくへはいって、にげてかくれていた女  
たちにそう云った。

「おれが、うまくやってやる。おまえたちは、だ  
まって見ているがよい。」と云って、おそろしいき

きめのある毒薬をとりだした。その毒薬をなつめの  
実にぬりつけて、お茶の中にいれた。

「長い旅でおつかれでございましょう。ますます

お茶でもめしあがってください。」

法師が茶わんをとると、八戒も手にとった。

「めずらしいなア、赤いなつめの実がはいって

いる。ご主人、この茶は、さぞうまいでしょうな。」

「うまいというものではありませんが、のめば、からだに力がでます。」

道士はむこうを向いて、にやりとわらった。これには、だれも気がつかなかった。

法師は、しずかにその茶をのんで、

「ごちそうさまでした、おまえたちもごちそうになるがよい。」

と、茶わんを下においた。

用心深い悟空は、すぐには、茶わんをとらない。

じつと茶わんを見つめていた。

「くいしんぼうの八戒は、ごくりと、ひとくちにのんでしまった。」

悟浄も、ごくりとのんだ。

と、みるみる三人のようすがかわっていった。顔色が青ざめ、手足がぶるぶるとふるえ、三人が三人とも、ばったりとたおれてしまった。

「やったな。けいりやくにかかったか、さんねん悟空は立ちあがるなり、持った茶わんを、道士め

かけて、はっしとたたきつけた。

「なにをなさる、」と道士は目を見はってどなった。そして悟空を丸くした、まなこでにらんだ。

「なにをなさるもないもんだ、てめえの出した茶は、ただの茶ではあるまい。のんだ三人が、三人そろって、このありさまだ。のまぬこのおれが一人たおれないのは、なによりのしょうこではないか。いってやろうか、この茶には、毒がもってあったにちがいないのよ。」

「はははは、いまごろわかったのか、ほめてやりたいが、もうおそいぞ。」

「だまれ。おししょうさまも、われわれも、おまえにうらまれるようなことはしてはいないはずだ。なぜ、こないたはずらをするのだ。それをいえ。」

「おお、いおう、盤糸洞の女たちのかたきをうったのだ」

「するとおまえは、まもの女のなかまか。」

「そうだ、やつとわかったな。さるの悟空、くやし

いだろうが、ここで死ぬのは、おまえたちよ。」

「ひきょう者め、」

(以下次号)



## 田舎医者

(其の二十九)  
見川 鯛山

バナナ

つづき

自転車屋はかみさんを亡くした。彼女は赤ら顔で首も腕も太く、力持ちで、自転車を両腕にかかえて運んだり、鉄の棒を曲げたりのはしたり、油だらけになって亭主のよりも働いていた。じょうぶそうな女だったが、脳溢血をおこして一晩で死んだ。

いっしょになって三十年、夫婦はけんかばかりしていた。二人のどなり合う声が街道をゆく乗合バスの中まできこえ、やがて格闘しながらもつれ合つて表の通りへころがり出してくるのだった。いつもかみさんが勝った。

死闘が終ると、彼女は薬箱から赤チンを出して、自転車屋の顔やすねを真赤にぬりつぶしていった。

「暴力はいけないよあんだ。あたしは乱暴は嫌い

だね。見なさい。こんなにすりむいて、かわいそうに……………」

だから近所では、だれもけんかを止めたりはしなかった。

やもめになった自転車屋は、日当たりのよい店さきの腰掛けに、毎日ぼんやりとすわっていた。

凍てついた裏山の雑木林で、鎌のような月に向かつて狐がないた。彼は冷たい夜具を頭からかぶって眠った。五十を越えたひげづらのこの男は、親なしの子のように悲しかったのだ。

そのころ、彼は酒をおぼえた。近所の居酒屋の炉端で、彼は何時間も飲みつづけ、だれかれとなく相手をつくつてしゃべった。相棒が帰りかけると、彼はコップ酒を何杯でもふるまつて引きとめた。一人ぼっちの寂しさがおそろしかったのだ。

夜は町へ出かけていった。赤い灯が彼を誘うのだ。パチンコ屋の騒音と、バーの女のあくどい香料にむせかえりながら、自転車屋はそのまま帰宅しない夜が多くなった。

やがて、悲しく長い冬が終わった。自転車屋のまわりの田んぼで、桃色のレンゲ草が一面に花を開き残雪をとかした小川の流れて、春の山女魚ヤマメがつれたその頃、彼は店の半分を改造して「バナナ」を建てた。ベニヤ板のうすいかべに自転車の真赤なベニキをぬった。黄色いボール紙の天じょうには色とりどりの万国旗を張りめぐらせ、そこから緑の電灯をつるした。テールには大輪の造花を飾り、正面のかべには支那美人の絵をかけた。

絵の下に本ものの女をおいた。自転車屋が町からつれてきたのだった。三十をとくに過ぎたその女の顔は、普通のものよりひとまわり大きく、目も鼻もそれに比例してりっぱだったが、口だけがさかすきのように小さくできていた。胎児だった頃何かの手ちがいどころなってしまうらしいが、その口にふしぎな愛きょうがあった。胴も手足もしまりがなく、肉がだぶつき、大きな乳房が腹のほうまでたれ下がっていた。乳あてをしてもちあげておけば、外国の女優だっけかなわないうたかな胸になるだろう

に、女はそれを、いつもヘチマのようにぶらさげていた。

夜になると、女はカウンスターのいすに股を開いてだるそうに腰かけ、短いスカートの奥で、虫に食われた太ももを赤い爪でポリポリ掻いた。客がくると女はゆっくりと近づいてゆき、重い腕で男の首を抱いて言った。

「何を飲むんだ？ ビールか酒か、焼酎もある」  
客がカクテルというと、

「駄目だ。ビールにしなよ。あたしア、ビールがいい」

女は自分のコップも持ってきて、ガソリン注入口みたいな小さい口から、客のビールを何ガロンものんだ。

酔うと、女はふところに手を入れ、腹の方から、ズルズルと乳房をひきずり出していう。

「な、でかいだろう。さわらせてやる」

若い男たちの手が不器用に乳房で遊んだ。

「ちょっとだけな、こっちのほうも、いいべ？」

男が女の股をさぐると、彼女の太い腕が怒り、若者をベニヤ板のカベへ突きとばすのだった。

「餓鬼のくせに生意気だぞ!! お前なんかオッパイだけさわってればいいいだ!!」

夜がふけて「バナナ」が終ると、女は自転車屋の床でねた。初夏の風が流れ、開け放った縁側から螢がきて、汗ばんだ二つの裸に飛びかい、水田の蛙が夜どおしやかましくないた。

二人の朝はいつもおそかった。ようやく隣人たちの目が角を立てて、自転車屋の「バナナ」をなぶりはじめた。きのうまでの同情と憐びんが、憎しみと羨望? に代わったのだ。

だが、自転車屋も女も、蛙のようにとん着しなかった。

昼近く自転車屋が起きた。やもめだった彼はなれた手つきで飯と汁とをじょうずに炊いた。できあがると女が起きた。女の白い大きなからだが重そうに歩いてゆき、裏の冷たい流れで、娼婦の肌を、キュッキュッと洗った。

そして二人は、新婚夫婦のように笑い合いながら飯と汁を腹いっぱい食った。

午後から、自転車屋は店の戸を開けた。鼻歌をうたいながらパンクをはる彼のかたわらで、女はおもしろがって見物していた。

夕方「バナナ」がぱっと明るい店を開けた。自転車屋はカウンターに頬づえをつけて、百姓たちにはふざけるかわいいい女を、ニヤニヤしながら見とれてばかりいた。

商売はなかなかの繁昌だった。

ある日、女が私を訪ねてきていった。

「なんだか知んねえが、このごろ、腹のぐあいがおかしいだ。腸がむくむく動くみてえなんだ」

診察を終えて…………

女に腹の中のぐあいを告げると、女は耳だぼを真紅に染めて、娘のようにはにかんで、いった。

「なんべまあ、いまごろになって、はずかしい」  
自転車屋と女は、間もなく正式な結婚をした。

(以下次号)

謹賀新年

一九八一年

敬称略

開 祖 平沼 桐江 責任役員 平沼 康彦 護持会役員 小山 権之丞

平沼 とみ 監 事 武居 藤吉 同 水上 清

代表責任役員 岡部 千三 同 平沼 幸一 同 吉田 仙太郎

責任役員 尾尻 天外 護持会々長 飯塚 孝司 同 枝久保鶴四郎

同 有馬 忠直 同 役員 梶谷 真一 同 若林 とく

同 町田 真之亮 同 小峰 久治 同 斉藤 恒作

護持会役員 井上 竹吉 青梅講元 宮沢 庚子生 越生講元 小森 茂

講埼玉トヨベツト 元 梶谷 真一 所沢観音講元 小山 権之丞 坂戸 講 若松 正数

浦和 講元 藤沢 帝 狭山 講元 井上 竹吉 秩父 講元 松本 忠太郎

片倉チツカリン 講元 平林 賢恵 豊岡 講元 粕谷 達二 川越 講元 原田 愛助

福徴 講元 新妻 宏充 飯能 講元 武居 藤吉 川越親友 講元 斉藤 恒作

五日市 講元 鈴木 嘉三 飯能畑 講元 増岡 隆助 板橋大山 講元 榎本 みや子

青梅大柳 講元 荒井 もと 仏所護念 講元 横川 一郎 与野同和 講元 井上 正雄

青梅千ヶ瀬 講元 荒井 多一 越生成瀬 講元 畑 くに 名栗 講 吉田 仙太郎



名栗講岡部安一	名栗講松下愛吉	大 <sup>ラジューム</sup> 松 <sup>館</sup> 柏木完之
野本栄治	淺見光雄	篤信飯能市小川文雄
岡部敏	淺見達次郎	〃
岡部仲次郎	町田延行	〃
矢島武一	町田要一	〃
佐野正助	片山武夫	入間市吉田紀美子健
枝久保鶴四郎	一	同
〃	名栗村梅花講員	東京田辺さわ
平沼幸一	名栗親世音 <sup>録</sup> 平沼宏之	東京宍戸睦子

浦	和	市平沼南川	東	京澁田トキ	東	京石毛鋼一
北	浦	和遊馬家定	川	越市山崎嘉七	大和拓友会々長	関口喜作
清	水	市松田江畔	東	京小川勘兵衛	所	沢黒田博
朝	霞	市広瀬秀雄	秩	父市小池清	川	越糟谷尚彦
東	京	江端政吉	東	京平沼杉之助	千	葉折原禎三
		株式会社 三信工業社長		内田桂一郎 内田さつき		秩父郡荒川村久保義雄
東	京	江崎元堂	〃	山崎まりえ	東	松山中里勇吉
東	京	松井吉雄	〃	山崎睦子	葉	山永井頼信

## 鳥居観音だより

### ○ 昨秋来山状況と終った行事

九月 七日(日)晴 参拝者多い、坂戸市多和目

弓削多正雄様来山壹万體二体申込受

九月 八日(月)曇 山崎まりえ様外四名来山、

当山の下見に山内に入られた。

九月十五日(月)晴 老人の日老人参拝多い、狹

山市宮岡様来山新米奉納受

九月十七日(水)晴 開祖ご夫妻来山、村の老人

会会場役場及センターに出席さる。

九月二十日(土)小雨 入間市南峰黒米トミ子様

佐野幸枝様来山各一万體観音申込受

九月廿一日(日)曇 日野市渡辺勇様来山、練

馬、荒川一枝様外一九名俳句吟行来山、庫裡にて披

露盛会だった。

九月廿二日(月)曇 青梅市小沢常男様一万體、

新町小沢かず子様一万體申込受

九月廿七日(土)曇 狹山市六本木初代様来山

九月廿八日(日)晴 開祖ご夫妻来山 所沢市

近藤節雄様来山一万體観音申込受

九月 卅日(火)晴 杉並江崎元堂様来山奉納受

十月 一日(水)晴 東京山崎まりえ様ご案内で

東京美術愛好会員来員、写生入山終る熱心に描いて

夕方帰京さる。

十月 二日(木)晴 埼玉県文書館、森田、坂田

両専門員来山、鳥居文庫見学さる。

十月 五日(日)晴 入山入車多い。

十月 六日(月)曇 飯能、若柳様来山供物奉納

十月 七日(火)曇 浦和、林セツ子様来山、飯

能、市川清二様来山、観光バス一団参拝。

十月 十日(金)曇 参拝者多い、浦和、細渕様

来山奉納受、青梅市、鈴木勉様来山奉納受

十月十一日(土)曇 開祖ご夫妻来山

甲府から平沢様、夫妻で来山当山の観音様をくま

なく見学さる、一万体一体申込受

武州印刷からとりぬ(四九号)搬入さる。

十月廿日(火)曇 来山多く、マイクロで来山あり。

十月廿六日(日)晴 埼玉トヨベツト(特)家族会、観世音センターに開催さる、来会者数百に及び、山内に清遊され、色づいた紅葉に目を見張られた。

その他の一般参拝も多く終日にぎわった。

十月廿八日(火)晴 片倉チッカリン社長様より秋季例法要へご奉納郵送受

十月廿九日(水)晴 原市場高橋謙吉様より秋季例法要にご奉納受

十月卅一日(金)晴 鳩ヶ谷小学生二五〇名入山里から来山なので山の学習に役立たれた。

其の他の入山多くなる。

十一月二日(日)晴 北浦和、遊馬様来山、奉納受、東京、小川様月例参拝来山、奉納受

其他団体入山、車の入山多い。

紅葉がおくれているが、三分色づいて来た。

十一月三日(月)晴 開祖ご夫妻来山、紅葉も毎日によくなり、来山も多くなる。

十一月五日(水)晴 鳩ヶ谷小学生二〇〇名入山高麗小学生一三三名入山、大宮地方財務行政会の一入来山、尾尻老師本堂で詳しく案内された。

十一月六日(木)晴 葉山の永井頼信様秋の法要にご奉納受、

車入山多い。

日高町小谷様夫妻来山、奉納を受、名栗

村、日高町のレクレーション

クラブ一行入山、紅葉を

探勝、天候が

不順だった割

に紅葉はよく

なつて来た。



紅葉のさかり入山者

十一月十日(月)晴 練馬竹友会一行来山、秋の恒例参拝、保田様の案内で老人の方方お元気に一日たのしまれた。奉納拝受しました。

吉田紀美子様来山、秋季法要へ奉納拝受す。

十一月十一日(火)晴 川口市 中村建策様、群馬

中村和男様来山

十一月十二日(水)晴 開祖先生ご来山、狹山市

六本木様

月例参拝

来山

十一月十

三日(木)

晴 雨後

好天気、

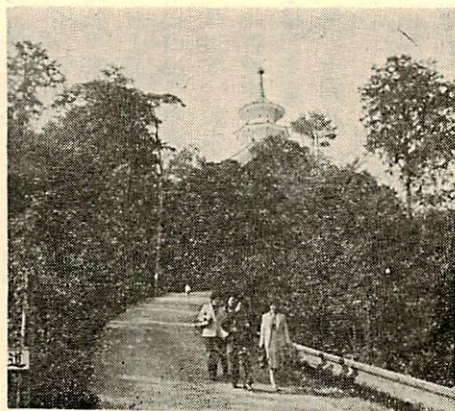
越生町、

畑くに様

一行来山

恒例参拝

奉納受く



三蔵法師靈骨塔附近の紅葉

十一月十四日(金)晴 入間市下藤沢、杉田秀雄様、日野市、渡辺勇様来山秋季法要に奉納受

青梅市、小峰久治様同奉納受

十一月十五日(土)晴 吉田健様夫妻外五名来山

一万体二体奉納、祈禱申込受

十一月十六日(日)晴 埼玉コロナ会来山、入山

奉納受

十一月十

七日、十時

三十分、定

刻には開祖

先生ご夫妻

も来山、

受付では

地元役員が

担当、接待

に当る。

埼玉トヨ

ペットの



本堂へ参道する来山者

平沼社長様、梶谷副社長（講元）様、浦和武州印刷  
（株）藤沢社長様、浦和講役員、平沼南川様、宮崎様の  
一行五十五名の来山は入の目を引く一団であった。

日本火災海上浦和店長様外五名、朝霞広瀬電気（株）  
社長様、東松山中里勇吉様、秩父市、松本忠太郎様  
外三名、五日市町、鈴木嘉三様、坂戸市、平井敏治  
様、東京松井吉雄様、吉祥寺ショッピングセンター  
（株）社長代理様、東京、実戸睦子様外十名、飯能市、  
小久保伴吉様、大和拓友会長関口様、板橋、植村様  
入間市、粕谷達二様、地元梅花講三十名参加。

導師、当山尾尻老師、鯨井、鈴木両老師により、  
定刻に修行された。

尾尻老師からのお話は講堂の人達に強い感動があ  
った。

開祖、平沼先生からもごあいさつがあつて、一同  
一そう親しみと敬意が高められた。

次いで救世大観音での法要が十一時三十分から、  
例によって修行された。

一同自動車で入山、丁度見頃な紅葉を眺めながら

堂宇へと歩を進められた。

丁度階段で、和光市から来られた、参拝者一行と  
開祖ご夫妻が会われ、そこで一行は、これ幸とばか  
りに、写真を一行と共に写されたのも奇縁だった。

本堂には

導師が先着  
された。

参拝者も

ぞくぞく入  
堂された。

名栗梅花

講のご詠歌

奉詠に始め

られ、法語

焼香へと修

行されたが

堂宇内に読経の声がひびき、木魚の音が冴えてきこ  
え、更にご詠歌の声は合唱のようにきこえて、経の  
よさをしみじみと感じた。



法要が無事に終了したのが丁度十二時だった。参拜の方は、思い思いに行動をとられ、山内で、中食される人、自動車で下り、庫裡で中食される人いろいろだったが、いつまでも紅葉を探勝しながら遊歩道をゆっくり下山された人も少なくなかった。

今年の紅葉は幸にこの例法要にすばらしかったので一属よろこばれた。

十一月十八日(火)晴 東京にある敬愛会と云うご婦人の会一行十三名来山、始めての人が多く、とてもすばらしいところだと感深そうだった。この日とみ子奥様も来られ、接待に当られた。

十一月十九日(水)晴 飯能ロータリークラブ一行来山、会長曾根文治朗様外五十名、正午庫裡に到着、中食、その後本堂で、尾尻老師から説明があった。一行始めての人が多く、感を深くされた。引きつづいて救世大観音に上られて、足がふるえると云っておられた。

皆種々な職業を持っておられる人だけに、始めてのこの催には感を一にされたようである。

十一月廿日(木)晴 寄居町教育委員会の一行三十名来山、文庫を見学された。専門的な立場から来山された。

十一月廿三日(日)曇 大和拓友会一行来山 本年度の総会を庫裡に開催された。の時に苗の奉納も毎年いたされるので、本年も立派な苗木を奉納いただいた。

一、棒 苗 大苗 十二本

一、つつじ 五本

一、ふじ 一本

前黒田会長、現関口会長、糟谷、折原両役員の方会員が久保隊長を囲まれて、いつもなつかしい、そして苦勞の話に花が咲いた。

奉納いただいた苗木は直ちに境内の要所に植栽が完了した。

十一月廿四日(月)曇 飯能市小川文雄様来山、入間市吉田紀美子様来山、新年祈禱申込受

十一月廿五日(火)小雨 紅葉も残り葉となる。新年祈禱の申込のお願い各方面に発送完了

十一月廿七日(木) 晴 来年の暦、東京へ引取りに、石井、本橋出張、帰路配本をしながら帰山。

元旦祈禱申込受付、東京清野様 八札

十一月廿九日(土) 晴 元旦祈禱申し込受

坂口様、飯能横川一郎様、狭山市、井上竹吉様

十二月一日(月) 晴 暦配布、祈禱札調製作業開始、二千枚準備着手

十二月二日(火) 曇 暦配布、東松山、入間西部秩父、青梅方面、本橋、石井手分けて出向く。

### ○ 新年から春の花行事のお知らせ

一月一日(木) 午前十時 本堂

昭和五十六年、辛酉歳、新年祈禱、午前

導師、尾尻天外老師、有馬忠直老師、鯨井師

家内安全を始め、商売繁昌、交通安全、諸願成就  
当病平癒、各種試験合格、安産、良縁結び。

修行後、来山者と初顔合せ、懇親の座を開く、札の配布又はお引取をいただきます。

二月三日(火) 節分会、午後三時、本堂

山頂の救世観音から豆蒔きを始め、本堂に及ぶ  
当日福豆を参拝者にさし上げます。

二月十五日(日) ねはん会、九時本堂法要

三月廿一日(土) 春分の日、十時彼岸法要

尾尻天外老師によって法要修行します。

### ○ 春は梅の花から

暑さ寒さも彼岸までと申します。

当山でも

もうこの頃

になります

と、庫裡の

近くで、う

ぐいすが鳴

き始めま

す。

梅の紅梅

が一番早く

庫裡の南面





の斜面に咲き始めます。

黄色のれんぎょうも、咲き出します。

白梅は紅梅のあとから咲いて、さくらの花が咲き始めるまで咲いています。

梅花は庫裡の庭から見るのが一番です。

うぐいすはその頃になると毎日鳴いております。

## ○ 椿の花

山つばきは梅の頃から咲き出していつまでも咲いています。山内には大きいのが沢山あります。

一重のものは従来からありますが、八重の椿は、最近植えたもので木は小さいが、咲き出しますと、いろいろな色があつてきれいです。

椿の木の大きいのは遊歩道を入れて仁王門附近にあります。自然のままの姿で何とも云えません。

## ○ つつじの花

つつじは当山の春の呼びものです。

四月に入るともう、つつじの三つ葉つつじの花が

山一面にと云うほど咲き出します。

その分布は本堂の周辺から、遊歩道を入れて仁王門の附近から、開祖堂の附近の岩場に咲いたものはおどろく程の花の群生です。

よくもこれまでに、広い境内に植栽されたものとおどろく以外何もありません。

いつも春の「とりゐ」でご案内していますが、今



年もこのつつじばかりは案内しないではおれられません。どうぞ、その一番よい季節にぜひりと、見て下さいませ。花の命は本当に短かく

それだけに人々は、その時とばかり観賞されるのです。

### ○ つつじまつり

自 四月一日  
至 五月末日

四月一日からわざわざ、この花のためにつつじまつりをいたします。

それには、お弁当、水筒にお茶などご持参でいらっしやして下さい。眺めのよいところで食事を取り家族団らんの日をたのしまれるのがよいでしょう。

この花が赤に咲き変って、五月末日まで、つつじまつりが開催されています。

### ○ 四月十七日春季例法要

当山の一大行事であります。

花の中、うぐいすの鳴く中、つつじまつりの開かれていますので、春季大法要を修行し、ご本尊、聖観世音菩薩を始め、諸仏の大法要が、営まれるのです

開始時間 十時三十分 本堂

十一時三十分 救世大観音、十二時終了  
別途ご案内もいたします。

五月八日 花まつり、月おくれ

十時花御堂を安置、おしゃか様に甘茶を上げて、供養をいたします。

### ○ ふじの花とあじさいの花

五月から六月にかけてふじの花とあじさいが咲き出します。

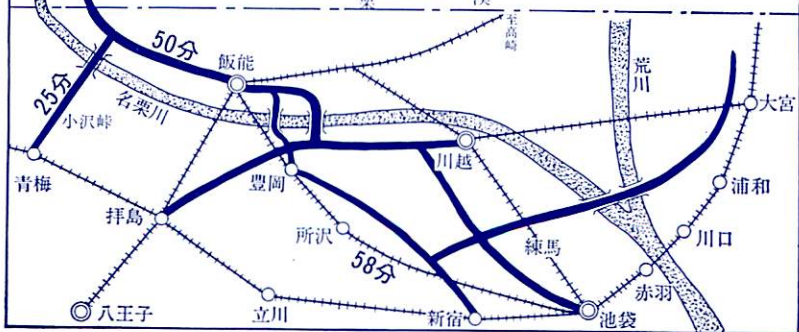
あじさいの株数は数百本あります。その中に数種類の花が、花あざやかに咲いて、花期も長いのです。ふじの花のさかりは、みじかいですが、盛り時は花の香りが、鼻をつくほどに匂いうつとりといたします。

ご来山をおまちいたします。

とりあ 第五十号 発行日 昭和五十六年一月一日  
編集兼 埼玉県入間郡名栗村 鳥居観音 岡部 千三  
発行人  
印刷所 浦和市仲町二一八―十五 武州印刷株式会社  
発行所 鳥居観音 電話 ○四二九七―九一〇四一七

# 白雲山

鳥居観音  
観世者センター案内図



## 春の行事

- 新年元旦祈禱 1月1日 10時
- 春彼岸法要 3月21日 10時
- つつじまつり 4月1日～5月31日

成木した、まさに天然つつじ園は全山に広がり、美をくりひろげます。

- 春季大法要 4月17日 10時30分
- あじさいとふじの花 5月～6月
- 常時祈禱申し受けます。

諸願成就、各種祈禱します。

- 山内入山  
文庫見学 常時 9時～4時30分